

リーディング・リテラシーを育てるための カリキュラム、学習指導・評価方法の開発

研究代表者 有元 秀文（基礎研究部 総括研究官）

1. 研究開始当初の背景

OECD（経済協力開発機構）は、わが国では国立教育政策研究所が調査の主体となって、2003年に2回目のPISA（生徒の学習到達度調査）を行った。しかし、周知のように、読解力について日本の平均得点は2000年調査では8位(522点)だったが2003年調査では、OECD平均と同程度の14位(498点)に低下した。これは、移民の子が多いアメリカなどと同程度で、低下幅は参加国中最も大幅であった。一方、数学と理科は1位グループで、世界最高水準であった。なぜ読解力だけが低水準なのだろう。

PISA読解力調査（2000年～2003年）の主な結果は次の通りである。

- ①OECD加盟国の平均得点（OECD平均）と比べると、「自由記述問題の無答率」は、2000年（+8ポイント）も2003年（+8.1ポイント）も、日本がOECD平均より際だって高い。
- ②2003年調査で、無答率がOECD平均より9ポイント以上高い問題は、100%が「自由記述」である。
- ③2000年調査と比べ、2003年には、自由記述問題の7割が3ポイント以上正答率が低下している。
- ④2000年調査と比べ、2003年に無答率が5ポイント以上上昇した問題の67%は、自由記述問題である。

つまり、OECD平均と比べ、日本の高校生は、自由記述問題が不得手で無答率が際だって高く、この傾向は2003年調査ではさらに強まっている。このことが、日本の高校生の読解力が低水準である主要な原因の一つであると考えられる。

2. 研究の目的

科学研究費の交付を希望する3年間の期間内に、次のことを明らかにしてかつ実施する。

- (1)公開された問題と同じ問題を研究協力校の高校1年生に解答させて、次のことを明らかにする。

PISAの問題は、小学生には難しすぎるのでPISAに倣って別に問題を開発する。

- ①どのような問題が得意でどのような問題が不得手か？
- ②記述問題の解答にどのような問題点や課題があるか？
- ③無解答だった生徒は、なぜ解答することができなかったのか？
- ④PISAの問題に対して、どのような意識を持っているか？文化的な抵抗感がない

か？

- (2)(1)の調査結果を踏まえ、研究協力者が、国際的なリーディング・リテラシーを育てる学習指導方法を開発し、授業実践を実施する。
- (3)授業実践の実施後、国際的なリーディング・リテラシーが育っているかどうかを事後テストで検証する。

3. 研究の方法

- (1)小学校班、中学校班、高校班に分かれて、カリキュラム、教材、指導・評価方法について、具体的な研究計画を立てる。
- (2)研究分担者・指導主事は、意識調査・実態調査の開発方法について具体的な研究計画を立てる。
- (3)事務局が研究会議の協議を踏まえて、事前意識調査問題を作成する。
- (4)問題については、全員がグループウェアで連絡を取り合い、全員が納得するまで修正を繰り返す。
- (5)研究協力校9校に依頼して、児童生徒及び教師に対して事前意識調査を、児童生徒に対して実態調査を行う。
- (6)今年度は、9人の実施委員の教員が年間各1回の研究授業を行う。
カリキュラム、教材、指導・評価方法案をあらかじめメールで送り全員で共有する。
- (7)事務局が、事前意識調査と事後意識調査を集計して比較対照し、実態調査の結果と合わせて次のことを明らかにする。
 - ①事前と事後で児童生徒の意識がどのように変わったか。
 - ②児童生徒の意識の変化と、実態調査及び各研究協力校における研究授業を中心とした学習指導にどのような関連があるか。その結果として、どのような学習指導方法が効果があるか。

4. 研究成果

OECD,PISA 読解力調査に対応出来るリーディング・リテラシーを育成する指導方法を開発するために大学教員6名、指導主事11名、小学校教諭12名、中学校教諭7名、高校教諭6名、合計42名の委員と連携して、以下のことを行った。

- (1)指導法改善に関する理論研究を完成し、わが国に合った指導理論を完成した。
その成果は「PISA型読解力」の弱点を克服する「ブッククラブ」入門ー多読とディスカッションで、楽しくクリティカル・リーディングを育てるー(明治図書)」として刊行した。
- (2)今までの指導法研究の成果に基づいて、授業実施の前に、グループメールで協議して単元計画・指導案を開発した。
- (3)小学校教諭12名、中学校教諭7名、高校教諭6名とともに、授業実践を行い、事後

授業研究会を行って成果を評価し改善を図った。

- (4) 単元計画・指導案・詳細な授業記録・成果と課題をウェブで公開し成果の普及を図った。
- (5) 全国大学国語教育学会において、研究代表者に加え、研究協力委員の中から小・中・高校教諭各1名、合計4名が3年間にわたって成果を発表した。
- (6) 意識調査を集計し、総合的に分析し、具体的に指導法を改善する方策を明らかにした。報告書に、事前調査と事後調査を比較し、質問項目ごとに学校段階別の変化、教師別の変化などをグラフ化し、どのような成果が現れ、どのような課題があるかを明らかにした。
- (7) 理論研究、授業研究、意識調査の分析結果を総合し、学会発表の要旨や指導資料と合わせて報告書を完成した。

本研究の報告書等

リーディング・リテラシーを育てるためのカリキュラム、学習指導・評価方法の開発
—OECD、PISA 調査に対応した、国際的な読解力が育つ授業を開発するために—
(平成 22 年 3 月)

<http://kaken.nii.ac.jp/ja/p/19330207>

http://www.nier.go.jp/arimoto/recentR/2007-09Report1_1.pdf